

---

# RAINBOW

懷裂感

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

RAINBOW

### 【Nコード】

N5774E

### 【作者名】

懷裂惑

### 【あらすじ】

七人の許婚との騒がしくも楽しい学園ラブコメ！

## プロローグ1 赤

中学を卒業しこの春から一人暮らしを始めるための準備をしていた3月のある日それはとうとうつにおこった。

「桜、引越しの準備は終わったの？」

「ああ、もう全部終わったよ」

「そう、じゃあちよっとお客さんが来るからお茶菓子買ってきてくれない？」

「いいよわかった」

弁当とお茶菓子を買って帰ってくるともう来ているのか玄関に靴があった。

居間に入ると椅子に俺と同じ年くらいの女の子が座っていた。

「こんにちは」

「あっこんにちは！」

「ほら、桜も座りなさい」

母さんに言われその子の前に座る。

「ところでこの子誰なの？」

「この子は赤嶺山あかみねさんか茶花ちゃんよ」



母さんの性格は知ってたけどここまでむちゃくちゃだとは思わなかった。

「まあ決まっちゃったことなんだし受け入れなさい」

「そんな簡単に受け入れられるかよ・・・」

「山茶花ちゃんのこと気に入らないの？」

「えっと・・・」

あらためて山茶花ちゃんを見るとかなりの美人だ。可愛いというより綺麗、いやかつこいいと言ったほうがいいだろう。スポーツでもやっているのかひきしまった体をしていてプロポーションもいい。

「私の事いや？」

「そんなことはないけど・・・」

「じゃあ文句ないわね」

「山茶花に文句はないけど母さんにはあるっつの」

「言って御覧なさい聞き流すから」

「聞き流すのかよ！」

「それじゃ私はしばらく出かけるから二人で話しててね」

そういつて母さんは出かけてしまった。

「えっと・・・山茶花は俺の事知ってたの？」

「うん！小さい頃から父さんと母さんに聞かされてたからね」

「他に候補がいることも？」

「もちろん知ってたよ」

「なんかこう・・・いやだとか思わなかった？」

「思わなかったよ、だって写真とかビデオとか見ていい人だって知ってたからね」

「そんなの見てたの！？」

「うん、桜君のお母さんが送ってきてたからね」

「そんなことしてたのか・・・」

「実際に会ってみてもいいなって思ったよ、だから他の候補には絶対負けないからね！！」

「他の人たちにはあったことあるの？」

「あるよ」

「知らないのは俺だけかよ・・・ところで他の人ってどんな奴らなの？」

「うーん・・・それは私からは言えないなあ・・・」

「ちょっとだけでもいいんだけど」

「まあ明日になったら一人あえるから」

「そうなの？」

「うん、入学式までに一日に一人ずつ会いに来るようになってるから」

「なんでそんな面倒なことを？」

「桜君のお母さんがその方が一人ずつじっくり紹介できるし面白いからだって」

「明らかに後半が本音だな」

「そうだね」

「まあ、とりあえずこれからよろしく」

「うん！よろしくね！-」

## プロローグ1赤（後書き）

### 登場人物紹介

神樹桜  
しんじゅさくら

主人公 15歳 6月13日生まれ 身長177

成績は上の中 家事は人並み 突然現れた許婚達に振り回される苦  
労人

神樹竜胆  
しんじゅりんどう

主人公の母 41歳 9月24日生まれ 身長165

この小説におけるナンバー2 ちなみにナンバー1は彼女の母 家事は料理と洗濯は人並み 掃除はプロ級 笑いながらとんでもないことを言ったりやっちゃったりする人

赤嶺山茶花  
あかみねさざんか

許婚その1 15歳 7月16日生まれ 身長162

主人公の事は割と好き 成績は下の中であまりよくない 家事は壊滅的 剣道部で中学の頃は全国大会優勝の経験あり おおざっぱで人の話を聞いてなかったりする



## ブローグ2 橙

あのあと母さんが帰ってくる前に山茶花は帰って行った。

昨日は顔合わせだけで本格的な許婚争奪戦は俺が7人すべての候補にあつてからだと母さんにいわれたらしい。

「しかし7人か・・・どんな奴らなんだろう。山茶花みたいにすぐに打ち解けるような人がいいな・・・」

母さんは親同士が決めたと言っていたから当然納得していない人もいるだろう。

それに俺に惚れるような女なんてあんまりないだろうしな。

「ふう・・・これで最後か」

俺は今高校に通うために引っ越したマンションで引越しの後片付けをしている。

業者の人があらかたやってくれたので一時間もあれば終わってしまった。

ちなみに母さんはめんどくさいからと手伝ってくれなかった。

まあ・・・はなから期待していなかったのでべつにいいが。

「さて・・・あとは隣への挨拶だな」

ピンポン

「ん？誰だ？母さんか？」

引っ越してきたばかりだし荷物は全て運んだ。来るとすれば母さん

ぐらいしか思いつかない。

ピンポン

「はい」

ドアを開けるとそこにはおっとりした感じのするショートカットの可愛い女の子がいた。

「桜君？」

「はい、あの・・・どちらさまでしょうか」

「はじめましてあたしは君の許婚候補の一人とっさかひなげし橙栄雛罌粟だよ」

「君が？」

「そう、あがっていい？」

俺が言う前に雛罌粟は中に入ってしまった。  
俺はあわてて後を追う。

「おー以外と片付いてるね」

「えーと・・・なんか飲む？」

「ああなんでもいいよー」

麦茶を二人分入れて持っていく。

「ありがとね」

「ところでよくここがわかったな」

「そりゃまあ竜胆さんに聞いたからね」

「そりゃそうか」

「半年前に」

「そんなにまえに!？」

「桜君さー、ここ買ったときになんか変なことなかった？」

「そういえば・・・俺が新居を探しにここに来た時他の物件は満室だったのになぜかここだけ空いてたっけ」

「ここの家賃知ってる？」

「知らないけどこの広さと間取りならかなり高いだろ」

「月1万だよ」

「安っ!!なんで!?!なんでそんなに安いの!?!」

「だってここ桜君のお母さんのマンションだもん」

「マジで!?!知らなかった・・・」

たしかにうちは金で困ったことは一度としてない。

「なんにも知らないんだねー」

「俺だけ聞かされてないことが多すぎるな・・・」

「ちなみに私もこのマンションに住んでるんだよ」

「そうなの？」

「この部屋は一番右端でしょ、それで隣から端っこまでの7部屋は桜君の許婚たちが住むんだよ」

「マジかよ・・・」

「みんな許婚の座を狙ってるから不公平があっちゃいけないってことで竜胆さんが手配してくれたんだよ」

「まあ、母さんならやりそうだな。ってことはもう全員いるのか？」

「うっん、住み始めるのは入学式の日からでいまは皆実家にいるよ。まあ既に家具とかは運んであるけどね」

「やっぱりそれも母さんが決めたのか・・・ところで一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「雛罌粟は俺と許婚になりたいと思ってるのか？」

「当然思ってるよ、なんで？」

「いや、親同士が決めたって言ってたから乗り気じゃない奴も中には居るのかなあと」

「うーん他の人は分からないけどあたしは桜君の事好きだよ」

「そうか・・・ならいいんだけど」

「うん、それじゃあそろそろ帰るねこれからよろしく」

「ああ、こちらこそ」

## プロローグ2 橙（後書き）

### 登場人物紹介

とっさかひなげし  
橙栄雛罌粟

許婚その2 15歳 2月7日生まれ 身長152

成績は中の中と中の下を行ったり来たりしている 家事はそこそこ  
できる 陸上部で以外に足は速い おっとりした性格でマイペース

### ブログ3黄

雛罌粟が来た次の日、マンションの周りの地理を理解するために買い物ついでに散歩をしデパートで食料と備品を買った帰り道、いかにも私迷つてますといった感じの人にあつた。

「声をかけるべきかな・・・？」

とはいっても俺もこの辺のことについてはさつき知つたばかりだ。こちらにも迷つたりしないだろうかと不安になる。

「でも困つてる人を見捨てるのはちよつとな・・・」

意を決して俺はその人に声をかける。

「あー」

「はい？」

でかい、それがその人の第一印象だつた。明らかに190近い身長をしているしそれに胸もかなりの大きさだ。おもわず見入ってしまった。

「もしもーし？」

「はっ！すいませんえーとあの大きいですね」

「はい？」

混乱してつい妙な事を口走ってしまった。

「あつす すいません」

「ええよ別にそう言われるのは慣れとるし、それでなに？」

「ああ、何か迷ってるようだったので」

「道教えてくれるん？ここにいきたいんやけど」

その人に地図を渡される、がどうみてもその場所に心当たりがある、  
というかありすぎる。

「あのーここにいきたいんですか？」

「そやで、わからへん？」

「いえ分かりますけど、ここにいったいなんのようなんですか？」

「じつはなあ、ここにうちの許嫁が住んどるんよ。まあ正確には私はまだ候補なんやけどな」

間違いない、なんとなくそんな気はしていたが・・・

「あの・・・その人の顔知ってるんですか？」

「写真は渡されたんやけど失くしてしまつてな、顔もあんま覚えて  
へんねん」

うち記憶力わるくてなーと笑いながらいう。



「案内しますね」

「おおきに」

その人を連れてマンションに向かう途中でいろいろと聞くことにした。

「お名前はなんていうんですか？」

「うちの名前はな、きせきすいせん黄夕水仙いうんや、あんたは？」

「神樹桜です」

「神樹桜・・・」

「どうしました？」

さすがに気付いただろう。

「いやどっかで聞いたような気がしてな」

気づいてなかった。

「ま、そのうち思い出すやろ」

「ははは・・・あ、着きましたよ」

「おおきに、ほな」

「いや俺もここに住んでるんで」

「そうなんか、ん？ちゅうことは・・・」

ここまでくれば気づいただろう。

「あんたうちと同じ許嫁候補やなっ！！」

全然気づいていなかった。

「どこをどう見たら女に見えるんですか！あなたの許嫁ですっ！！」

「知つとつたよ」

「知つとつたんかい！！」

「そんな怒らんでもええやん、たんなるあいさつ代わりのギャグやで」

「はあ・・・なんか疲れたよ・・・」

「ほんなら荷物もつたるわ」

「でもこれけっこう重いですよ」

「楽勝や」

水仙は荷物を軽々と持ち上げさっさと行ってしまっ。俺もあわてて後を追いかける。

「力持ちなんですね・・・」

「まあな力には自信あるで」

俺の家に着くとまず冷蔵庫に食品を入れ、そのあと水仙と話すことにした。

「えっと・・・あらためてあいさつを・・・神樹桜です」

「黄夕水仙やよろしゅうな、あと敬語やなくてええで、同い年やし許嫁なんやから」

「いや・・・水仙って背が高いからつい」

「まあたしかにかなりでかいしなーうち」

「どうやったらそんなに大きくなれるんだ？」

「鍛えるんや！」

・・・どこを？

「桜だつて体鍛えとるやろ？」

「ええ、まあ」

「それにかなり強いやろ」

「まあ、一応は」

3歳のころからずっと母さんに鍛えられてたからな。

「うち強い人が好きなんよ。せやから桜のことは他の女にはわたさへんで」

「そうか・・・」

どうやら水仙は許嫁にたいして乗り気なようだ。

「なんやちよつと眠くなってきたわ寝かせてもらっで」

「え・・・ちよ、ちよつと」

いうやいなや水仙は床に横になり眠ってしまった

「なんつつか・・・マイペースなやつだな・・・ま、とりあえずこれからよろしくな」

## プロフィール3黄（後書き）

### 人物紹介

黄夕水仙 きせきすいせん

許婚その3 15歳 4月6日生まれ 身長189  
成績は上の下 家事は掃除はあまりできないが料理はわりとできる  
洗濯は普通 多種多様な武術をやっている 握力は150ある 巨乳、ていうか爆乳

## プロローグ4 緑

リリリリリリリリリリ・・・

「うーん・・・」

電話が鳴る音で目が覚めた。時計を見るとまだ6時だ。

「誰だこんな時間に・・・もしもし？神樹ですが？」

「こちら神樹ですが？」

「なんだ母さんか・・・何か用？」

「用がなくちゃ電話してはいけないのですか？と竜胆さんはベタベタな質問で返します」

「・・・になにそれ」

「いや、いま人気のラノベのキャラの口調をちょっとまねしてみたのよ」

「いい年してラノベ読んでんのかよ」

「いいじゃない、本当に面白いものは誰が見ても面白いのよ」

「まあいまさら母さんの趣味に口出ししないけどさ、それで？そんなこと言うために電話してきたの？」

「まあ、6割がたそうなんだけどね」

「多いな!」

「だって言ってみたくなるじゃない、『人がゴミのようだ』とか『目が、目があつ』とか」

「なんでラピータネタなんだよ」

「私が好きだから」

「はいはい、じゃあ残りの4割の理由を聞きましょうか」

「今日暇?」

「暇だけど?」

「あなたが今日暇だということを、この私はあらかじめ予測していました」

「・・・・・・・・・・」

「あれ?元ネタわかんなかった?」

「いや・・・知ってるけどマイナーなキャラで来たなあと・・・」

「作品自体は有名だけどね」

「いいから本題いってくれ」

「いまから言う場所に12時までに来てほしいのよ」

「わかった」

「高級料亭Acconitumってどこよ」

「料亭らしからぬ名前だな」

「結構有名なところよ。なんでもフランスで中華料理の修業をしてきたシェフが作る京懐石で有名なんだって」

「なんか行きたくなくなってきたな・・・」

「じゃあそついうことで、ちゃんと行きなさいよ」

「はいはい」

そして11時に家を出て電車とバスに乗り向かう。

「ここ・・・だよなあ・・・」

思っていたよりでかい、普通の服で来てよかったものかと不安になるがとりあえず入ってみるが入口で止められてしまった。

「すみせんがお客様うちは一見さんお断りなのですがどちらさまからのご紹介ですか？」

「ああ、えーと・・・神樹竜胆ですけど・・・」

とりあえず母さんの名前をだしてみる。



「し・・・神樹さまのっ!?し・・・失礼いたしましたっ!こちらへどうぞ!..!」

かなりの効果があったようだ、うろたえながらも案内される。

「こちらの間にお通しするように仰せついております」

あせびの間というところに通される。

「すでにお連れの方もお待ちです」

「え?あ、ああ・・・」

なんとなくそんな気はしていたがおそらく許婚の一人だろう。

「それではごゆっくり・・・」

そういつて店員さんは行ってしまった。

中に入ると着物を着た女性がいたのでその前に俺も座る。

「はじめてお目にかかりまんなあ、うちは緑清稚児百合つかみせすいめいどす。あんさんが桜はんどすか?」

「はい、そうですけど・・・京都のかたですか?」

「そうです」

稚児百合さんは着物の似合う京美人といった感じで肌が真っ白で腕も細く髪も黒々として綺麗だ。

「あの・・・待ちましたか？」

「いや、そないにまつとりません30分くらいです」

「けっこうまたせちゃったみたいですね・・・すいません」

「別によろしおす、うち待つのも好きですから」

「いえ、俺は待つのも待たせるのも嫌いなんですよ」

「やさしいんどすなあ」

なんかこの人と話していると力が抜ける感じがする、というか・・・  
落ち着くかんじだ。

「ところで桜はん」

「はい、なんですか？」

「なんで敬語なんですか？同い年や」

「ああ、なんか稚児百合さんには失礼な言葉を使えないような気がして・・・」

「別にうちがかましまへんよ。いずれうちのムコはんになるんやし」

「えっと・・・それは・・・」

「うちは他の娘に負ける気はおまへん。それともうちの事かなんい

「ですか？」

「えっ・・・そんなことはないですよ!！」

「やったらええでっしゃろ？敬語はやめておくれやす」

「はい・・・」

なんというか・・・この人には一生かなわないだろうなあと思った。

「あと名前は呼び捨てでかませんよ」

「えっとじゃあ・・・稚児百合・・・でいいのかな？」

「よろしおす、そんならあらためて。これからよろしゅう桜はん」

「「こちらこそよろしく」

## プロローグ4緑（後書き）

### 人物紹介

緑清稚児百合つかさやちゆり

許婚その4 15歳 9月19日生まれ 身長162

成績は中の中 勉強しだいで上の上になったりする 家事は料理は  
プロ以上その他は普通 怒らせると一番怖い 大会社の社長令嬢

## プロローグ5青

高校での授業に備えるため中学の復習でもしようかと思ったが家ではいまいち集中できそうにないので自転車で10分くらいのところにある図書館に行くことにした。

1時間ほどたつたころ隣に誰かが座った。今日は平日でまったく人はいなく、席も俺が座っている所以外は空いている。

わざわざ隣に座らなくても、と思いながら隣を見るとそいつも勉強をするらしく、ノートや教科書を出し始めた。

しばらくこそごそしていたかと思ったらいきなり声をかけてきた。

「ねえ、シャーペン貸してよ　べ・・・別にあんたが隣にいただけであんたのシャーペンを借りたかったわけじゃないんだからね！」

「・・・・・・・・・・はあ？」

あぜんとしているとその子は

「やば・・・しくじった・・・」

と言って出て行ってしまった。

なんとなくいやな予感がして後を追いかけるとそいつはすみっこでなにやらブツブツとつぶやいていた。  
とりあえず声をかけてみる。

「おい」

「ひゃうつー!？」

おどろいてこつちを振り返るとなかなかの眼鏡美人だった。

「な、なななななんですか!？」

「いや、えーと・・・君俺の名前知ってたりする？」

「神樹桜さんですよね？」

あ、やっぱり知ってた。てことはこの子もそうなんだろう。

「えっと・・・許嫁の一人だったりする？」

「はい、私は青陽露草はるやつゆくさです」

「えーと・・・さっきのなに？」

「ツンデレです」

「・・・なにそれ？」

「ツンデレというのは普段はツンツンしているけど好きな人と二人になったりするとデレデレしてしまう属性のことです」

「いやそれは知ってるけど・・・なんでさっきそれをやったの？」

「桜さんにはいったいどんな属性で向かえば効果あるのかと思いついてね」

「属性って・・・」

「さっきの感じではツンデレ属性はなさそうですね」

「えっと・・・露草ってひょっとしてオタクとか？」

「ちっ違いますよ！！たしかに週4で秋葉にいきますけど！ゲームや漫画は観賞用と保存用と普及用に最低3つは買いますけど！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「コスプレしたり同人誌書きちゃったりしてますけど決して！決してオタクではないんです！！」

「オタクでしょ？」

「違います！！ああ、だめです！だめなんです！！オタクだなんてばれたら嫌われちゃう！！」

「えっと・・・落ち着いて・・・」

誰もいないとはいえ図書館で騒ぐのはダメだろう。とりあえず図書館近くのファミレスに移動した。

「落ち着いた？」

「はい・・・さっきは取り乱してすみません・・・」

「なんかあったの？」

「昔いろいろと・・・」

「まあ俺はオタクだからって嫌いになったりしないから・・・」

「本当ですか？」

「うん、好きな物を好きって言える人のどこが悪いの？」

「ありがとうございます・・・」

「じゃあこれからよろし・・・」

「あ~~~~っ!!」

「ど、どうしたの？」

「今日はイベントに行くんですけど!!早くしないと始まっちゃう!!」

「そ・・・そう・・・」

「じゃあ私はこれで!また会いましょう!!」

そう言つと脱兎の如く店を出て行つてしまった。

「なんか・・・すごい奴だったな・・・まあ、俺はああゆう奴好きだけだね」



## ブローグ5青（後書き）

### 人物紹介

青陽露草  
はるやつゆくさ

許婚その5    15歳    6月26日生まれ    身長170

成績は中の上    家事はできるけどやらない    絵はかなりのうまさ  
ちなみに眼鏡はキャラ付のための伊達メガネ

## プロローグ 6 藍

5日連続でキャラの濃い人たちに会ったため自分では感じていなかったが疲れていたのだろう、10時ぐらいまで眠ってしまった。

「かなり遅くまで眠っちゃったな、さて起きるか・・・」

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「朝ごはんできてる」

「ありがとうな」

テーブルの上には純和風の朝食が出来上がっていた。

「美味そうだな」

「めしあがれ」

「いただきます」

「うわ美味しいなこれ」

「おかわりは？」

「もらおうか」

すべてきれいにたいらげてしまった」

「いちそうさま」

「おそまつさまでした」

「ところで」

「はい？」

「いやまあなんとなく分かってんだけどとりあえず聞いておこうか  
と思って」

「なに？」

「君だれ？」

「あなたの許婚候補の一人 藍<sup>らん</sup>隠<sup>やす</sup>藍<sup>あい</sup>」

「やっぱり」

「よろしく」

「ああ、よろしくな ところでどうやってここに入ったんだ？」

「ピッキング」

「するな」

「わかった」

「わかればいいよ」

「次からは扉を壊す」

「やめてくれ」

「じゃあどうしろと」

「とりあえず俺に無断で入ろうとするな」

「でも」

「でも？」

「竜胆さんから許可はもらってる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、想像はしてたよ・・・・・・・・」

「じゃあ私はこれで」

「ああ、じゃあね」

そういつて藍は帰っていった。

「なんだっ たんだあいつは・・・・・・・・」

## プロローグ6 藍（後書き）

### 人物紹介

らんやすあい  
藍隠藍

許婚その6 15歳 11月21日生まれ 身長155

成績は中の上 家事は万能 つかみどころのないふわふわした性格  
ピッキングや尾行などの怪しい技をいろいろもっている。

## ブローグ7紫

夕方五時、そろそろ夕飯の支度をしようかと思ったときに電話がかかってきた。

「もしもし」

「もしもし・・・私メリーさん今 あなたの後ろにいるの・・・」

「くだらないことやっでないでさっさと用件言ってよ」

「もうちょっとちゃんとつっこんでくれないとお母さん泣いちゃうよ？」

「そんなことで泣くほど母さんは柔じゃないでしょ」

「お母さんの心はヒビロノオオガネよりも柔いのよ！」

「十分丈夫だろ！っていうかもうちよつとわかりやすい金属で譬えろよ！」

「お母さんはガタツクが好きだったな」

「俺はキックホッパーが・・・ってそんなこと話してる場合じゃなくて、用件をさっさといってよ」

「夕飯まだよね」

「ただだけど」

「じゃあ今から言うお店にいつてね。いいよね？答えは聞いてない！」

「今日はライダーネタか・・・」

「とにかく行きなさいよ」

「わかったよ」

そんなこんなで夜7時俺は母さんに言われたレストランに来ていた。

「何かすっごい高級そうなんですけど・・・」

まあ、母さんの紹介だから大丈夫だろうと思って入ろうとしたら店員に止められてしまった。

「すいませんが今日は貸し切りとなっております」

「えっと・・・神樹竜胆の紹介なんですけど」

「ああ、息子さんですねではどうぞ」

案内された席にはすでに人が座っていた。まあおそらく許嫁候補の最後の一人なんだろうなと思いながら席に着いた。

「こんばんは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉が出なかった。別にとてつもなく美しかったとかそういう理由ではない、判断しようにも顔が見えない。

彼女は仮面をかぶっていた。

最近アニメ化した某小説の青龍刀をもったキャラがかぶっているような般若の面をかぶっていた。

なんでそんなものを？と思っていると・・・

「なんで・・・」

「？」

「なんで挨拶したのに答えてくれないの？なにか間違っちゃった？私なにか間違ったことした？したならごめんね、謝るから・・・そうだよね謝ったって許してくれないよね、私なんてこの世にいないほうがいいんだよね？そうだよね？あ・・・ごめんね、こんな分切り切ったこと聞いちゃって。」

「・・・・・・」

「ごめんね、こんなところに呼び出して、迷惑だったよね、ほんとにごめんね、今すぐ死んで償うからね」

そう言い終わったとたん彼女は懷からサバイバルナイフを取り出し手首を切ろうとした。

「ストップ！！」

俺は彼女の両手を押えた。

「離して！！」



「いいから落ち着け!!」

「だってだってあなただって私に死んでほしいって思ってるんですよ!?!こんな変な女いないほうがいいって思ってるんですよ!?!」

「思っ<sup>て</sup>ねーよ!いいからナイフを放せ!」

「やだやだやだ                      っ!!」

「やかましい」

「へぶっ!?!」

ゴンという音とともに彼女に飛んできたなにかがあたって彼女が倒れた。

「まったく・・・心配になって来てよかったぞ」

「稚児百合!?!なんでここに?」

「その子はうちの昔からのお連れどすねん。なんちゅうかその・・・対人恐怖症として。」

「それで仮面を?」

「ええ、まあ詳しいことは彼女から聞いてください」

「はあ・・・ところでさっき何を投げたんですか?」

「あれどす」

稚児百合の指差したところを見ると硬くて重そうな銅像が転がっていた。

「・・・なんですかあれ」

「このレストラン Campsis grandiflora の創始者イベリスシェフの銅像どす」

「なんであんなもの投げたんですか！危ないじゃないですか！ていうかなんでそんなもの投げられるんですか！！」

「ええと・・・まず最初の質問に対しては彼女が丈夫さかいでもない。次の質問に対しては鍛えてますからとしか」

「そうですか・・・としかこっちは返せませんよ・・・」

「うーん」

仮面をかぶっているので分かりずらいが起きたようだ」

「あ、ゆりちゃんだ、なにしてるの？」

「あんさんのことが心配で来たんどすよ」

「そうなんだ、ありがとう」

「それよりも桜はんにちゃんと自己紹介おしやす」

「あ、うん。」

立ち上がって向き直りお辞儀をした。

「初めまして、私は靈紫秋桐です」

みこむらあきむら

「ああ、よろしく」

「ほなうちはこれで」

「あれ？ゆりちゃん帰っちゃうの？」

「今日のはんさんの時間でっしゃろ。ほな二人ともまたあす入学式  
であいまひよ」

そういつて稚児百合は店を出て行った。

「えっと・・・じゃあ食事でもします？」

「あ・・・はい」

いまさらながらここがレストランであることを思い出した。  
騒ぎが収まったのを確認したウェイターが料理を運んできた。

「美味しそうな料理ですね」

「はい、ここは私の父がオーナーをやっているんです」

「そっなんですか」

「今日はシェフが腕によりをかけて美味しいものを作ってくれます  
うです」

「それは楽しみです」

確かに料理はどれもこれも美味しかった。食事が終わったので俺はおもいきって秋桐に聞いてみることにした。

「なんで仮面なんかかぶってるの？」

聞いたとたん彼女の様子が変わった。

「・・・変ですか？」

「え？いや・・・」

「いいんですよ別に、私気にしませんから」

そう言いながらもグラスを持つ手が振るえている。

「その・・・なんか変なこと聞いちゃったみたいですね、すいません」

「いえそんな、あなたが気にする必要はまったくもって微塵もありません、私がこんな格好しているのが悪いんです。ほんとに・・・  
どれだけ人に迷惑かけたら気が済むんでしょうねえ私は。」

俺は秋桐の手にまたナイフがあるのを発見した。

「あのそれ・・・」

「ああ、これですか？大丈夫ですよ、今すぐにあなたを不機嫌にさせたものを排除するための道具ですから。あなたに危害は加えません」

「いやそういう意味じゃなくて・・・」

「ああ、そうでしたねすみません、私なんですが、私みたいなものは返事するだけで、目に映るところが存在するだけで迷惑ですよね、大丈夫です、もうすぐいなくなりますから」

「ちょ・・・待つ・・・」

秋桐がナイフを振りかぶった瞬間。  
イベリスシェフが飛んできた。

「はぐっ!？」

後頭部に当たり再び気絶する秋桐。

「帰らなくて正解でした」

「稚児百合!！」

「まるつきしこの子は・・・」

「助かったよ」

「桜はん、この子を止めるときは思いっきりやったほうがよろしおす」

「・・・みたいですね」

「まあ、悪い子ではおまへん。ただちよいトラウマがあつてネガティブで対人恐怖症なだけどす」

「それけっこう大事ですよ・・・」

最後の最後で大変なやつが来たなあと思った。

「まあ、あすさかいこの子もわいらとおんなじく仲ようしてあげておくない」

「はい・・・」

そうだ、これで終わりじゃないんだこれからなんだ、と明日からの高校生活を不安に思ったがまあなんとかなるだろうと前向きに考えることにした。

## ブローグ7紫（後書き）

みこむらあさきり  
靈紫秋桐

許婚その7 15歳 9月6日生まれ 身長180

成績は学年トップ 家事は料理以外は得意 昔色々あってこんな性格に 仮面で隠れていてわからないがかなりの美人で水仙に負けな  
いくらいの巨乳 稚児百合とは幼稚園の頃に知り合った 体が丈夫  
で傷もすぐに治る 特異体質

## 入学式1

今日は高校の入学式なので制服に着替え朝食を食べ、食べ終わった  
ころチャイムが鳴った

ピンポン ピンポン ピンポンピンポンピンポンピンポン  
ピピピピピピ・・・

「うるせえっ！ー！」

勢いよくドアをあけるとそこには

「おはようー！ー！」

「おはよー」

「おはようさん」

「おはようさんどす」

「おはよう」

「おはー」

「おはようございます」

全員集合していた

「おはよう、ところで誰だ？さっきチャイムを連打したのは」



「はいあたしあたし！！」

手を上げた山茶花に俺はチョップをくらわせる。

「いたっ！なにすんの！！」

「一回押せばわかるっつの・・・稚児百合も止めてよ」

「起きてへんかもしれへんちゅうことも考慮してあえて止めまへん  
どした」

「あっそう・・・まあ皆とりあえず中上がりなよ」

とりあえず7人とも中にあることにした

「以外とかたずいてるんだね」

「エロ本ないのかエロ本！！」

「探せ」

「やめーな」

「なあ、お茶頂戴」

「あ、じゃあ私がいれますね」

「私も手伝います、桜さんお茶どこですか？」

「戸棚に入ってるよ」

雛罌粟はきよろきよろと見渡し、山茶花と藍がはしゃいでいるのを稚児百合が止め、水仙に露草と秋桐がお茶をいれている。

「ところでなににきたんだ？」

「せっかくやさかい皆で行こうと山茶花はんが提案しまして、ほして皆で迎えに来はったんや」

「そうか、でも早すぎない？」

まだ入学式までにはかなりの時間がある。

「山茶花はんと水仙はんが急かしたさかい」

「ああ、なるほど」

その二人はと言うと山茶花は藍と雛罌粟といっしょにゲームをやっていて、水仙は座ったまま寝ている。

「ところでさあ」

「はい、なんですか？」

「秋桐と露草がなんか普通なんですけど」

「あの二人は確におかしいところがありますけどそないに頻繁におかしくならはったりはしまへん。最初に会ったときは二人とも緊

張しとつたんや」

「いやなんか最初と感じが違つたんで」

「別に作者があないなキャラを書くのがめんどくさくならはったとかじゃあらしまへんで」

「何言つてんですか？」

「こつちゃの話どすかまへんでおくない」

「はあ・・・」

「ねえみんな！早く学校いこう！！」

「いー」

「二人ともようしんぼでけへんみたいですね、ほなそろそろ皆はん行きまひよか」

「そうだね」

「ほんなら行こうか」

「湯吞かたずけないと」

「置いて良いよ俺あとでやるから」

そんなこんなで俺達は学校に向かった。

## 入学式1（後書き）

舞台裏

稚児百合（以下稚）「そんなこんなでようやっとはじまりましたね  
RAINBOW」

桜「ところでここなんなんですか？」

稚「ここは本編では語られへん裏話をしはるトコ、通称舞台裏どす  
ちなみに司会進行はほぼうちがやらせてもらうで」

桜「でも稚児百合は出番が多いから他の奴にやらせた方がいいんじゃない？」

稚「うちが司会進行をやってるのはうちが作者のお気に入りだから  
どす」

桜「なんかずるいね・・・」

稚「かてキャラの設定についてまともに考えたのってうちだけどす  
ねん」

桜「そうなの!？」

稚「ほとんどのキャラは行き当たりばったりで書いてまんねん」

桜「そんなんでもとにも書けるのか？」

稚「さかいに今回いきなり性格が変わったのがふたりおつたやろ」

桜「ああ、なるほど」

稚「本編でもちよいふれてるんやけどあの二人の性格は正直作者が書きにくいつて思つてしもたのよ」

桜「そんなに変えていいのか？」

稚「オタクとヤンデレは好きなんやけど書きにくいつてのが本音ね」

桜「俺は大丈夫だね？主人公だし」

稚「主人公だからって油断せえへん方がええで、作者が今はまつてるアニメとか漫画とかで変わったりしはるかもしれへんさかい」

桜「そんな自由なのかこの作品・・・」

稚「さて、そろそろ終わりましたようか。とその前に、舞台裏では質問などを受け付けてます、どしどし送ってください」

桜「送ってくる人なんているのか？」

稚「まあ、のんびり待ちまひよ、そんならこのへんで、ほなさいなら」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5774e/>

---

RAINBOW

2010年10月21日14時18分発行